

税金に支えられて

藤女子中学校 一年 前田 海音

十三年前、全前置胎盤で管理入院していた母は大出血し、私は予定日より二か月ほど早く緊急帝王切開で誕生した。早産児で低出生体重児の私はNICUにて人工呼吸器装着、中心動脈カテーテル留置などある意味フルコースの治療を受けた。また、その後の経過で指定難病と診断され、今に至る。毎月の通院、投薬治療、検査や入院は現在も続いている。両親は私に言う。「海音の命は、みんなに繋いでもらったものだよ。」と。私は今まで病院のスタッフさん達や、家族のことを「みんな」と称していると解釈していた。しかし私はこの夏、「みんな」は顔も知らないたくさんの人たちをも含んでいたことを知った。

先日私の「難病手帳」の更新手続きの書類を母が作成していた。この手帳を指定医療機関で提示することで、医療費の自己負担は二割相当額または自己負担上限額が定められた額になる。税金による補填で私の医療費負担は軽減されているのだと母が説明してくれた。母は続ける。「海音が生まれた時も、正直どれだけの請求が来るのかと思っていたの。私の入院費とダブルで支払いどうなるかって。でも、高額医療費制度の適用で拍子抜けするような金額でね。海音の病気とか、これからの不安は消えやしなかったけど、金銭的な負担がカバーされたことでどれだけ助けられたか。私達家族は名前も知らない、顔もみたこともない、たくさんの人の人社会保険料や税金で助けてもらったんだよ。」と。衝撃だった。世の中の人がゆるやかに繋がりに、支えあう手段として「税金」があるのだと初めて実感した。私が今まで、安心して必要な治療を受けることができていたのは、税金という後ろ盾があったことだったのだ。

中学生の私にとって、税金の集め方や使い道というのは身近な話題とは言えない。しかし、身の回りに目を凝らすとあらゆる場面で「税金」が私達の暮らしを支えている事実が見えてきた。環境整備、教育の充実、公的サービスは税金なしでは成り立たない。しかし、少子高齢化が進む日本で例えば社会保障のコストは膨大になり、税金で賄いきれない現状を知り、私は危機感を覚えた。今こそ私達は税金について正しい知識を持ち、適切な納税をすることで社会に貢献しているという意識を持つ必要があると思う。

私の十三年間の人生は、税金によって生かされたと言ってもいいだろう。そしてこれからも社会保障の恩恵を享受するのならば、私は感謝を忘れず、修身の道を外れずに、今やるべきことに十分励みたい。そして成人したあかつきには、恩返しのできる気持ちで納税したい。税金とは、よりよい未来へのパスポートだと私は考える。税金について学び、知識を少しずつ得ている今、納税という「支え、支えられる循環」の仕組みに自分も参画できる日が、待ち遠しく思っている。